

# 風来クロスワールド

八石マムミラー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この世界とはある和風な世界。多くの風来人が旅をしている。英雄になりたい者、財宝を求めて一攫千金を狙ってる者、そして、元の世界に戻りたい者などがいた！

# 目次

第1話	プロローグ的なナニカ	1
第2話	もりのようかん	6
第3話	ナタネ村へようこそ	12
第4話		19
第5話		24
第6話		28



# 第1話 プロローグ的なナニカ

この世界はとある和風な世界。

多くの風来人がいて、多くの風来人達が旅をしている。

英雄になろうと思ってる者、遺跡やダンジョンを冒険して財宝や秘宝を見つけ、一攫千金しようとしている者、そして・・・元いた世界に戻りたい者など色々いた。

この物語では元々いた世界からこの世界にきてしまった風来人が多く存在している。その冒険者たちは元の世界に戻るすべを探すべく、旅を続けていた。

今、一番流行りの情報、流行の場所はギアナ高原にあるというテーブルマウンテン。そこに住む黄金のコンドルを見たものは何でも願いが叶うといわれている。

元いた世界へと戻りたい者達はみな、黄金のコンドルの噂を信じてテーブルマウンテンへと旅を続けていた。

この少女もその冒険者の一人だった。

「あゝ、おなか空いちちゃったなあ」

この女の子はねりね。金髪のツインテールと黒色のバラのドレスが特徴的な女の子。風来人の一人であり、別の世界からこの世界に来てしまった人の一人である。

何日も食事をしておらず、おなかが空いていたようだ。

「に、にくっ〜」

あまりのおなかのぺっこぺこさにねりねはピョンピョコ飛び跳ねているマムルの事をお肉だと思っってしまった。そして「あ、マムルだったと呟く」

「マムルなら・・・焼けば美味しそうね・・・」

ねりねは腰から短剣を取り出し、マムルへと斬りかかる。

マムルは一瞬で絶命した。

そして、ねりねはマムルをこんがり焼いた。

「さ〜と、いただきます〜す!」

ねりねは短剣でマムルの体を切って食べる。最後にマムルの尻尾焼きを食べて食事終了。

マムルの尻尾焼きはウマイが、マムル1匹程度でははらぺこだったねりねの空腹が満たされるわけではない。

おなか空いている中、ねりねは近くの村へと向かっていった。

その村は名も無き一つの村。小規模の小さな村だった。

「何か・・・食べ物ありませんか?おなか空いて死にそうなんです」

「ん〜、村の食料は少ないが、食べさせてやろう」

村長らしき爺さんが私にシチューを食べさせてくれた。

私はあるがたく、シチューを食べた。なんてシチューはおいしいんだろう。

「旅の者。もし、よろしければ願いを聞いてもらえないでしょうか？」

「はい。訳ありません。この村は食料が少なそうに思えましたし・・・」

この村は人々が結構やせ細っており、食べ物が少なく感じた。

作物は見かけたので去年とかに凶作と言う可能性もあるが、悪い者に目をつけられてると言う可能性が高いだろう。

「この村の近くの洞窟に住むある魔物が村の食糧や財宝を奪っていくんです。食糧をもし、渡さなければ女や子供や若い男性を生贄にささげなければいけなくなるんです。村の人も何人か生贄にされています。旅ガラスさん、この村を救って下さらないでしょうか」

「はい。おいしいシチューを食べさせてもらつたし、この村を救ってあげます。報酬はありますよね？」

「はい。無事魔物を倒してくれたならば報酬は弾みます。何でも渡します！」

こうしてねりねは一人で村の近くの洞窟へと足を踏み出した。

洞窟にはキラバット、にらみへビ、ヤミウツチー、兵隊アリ、毛玉などのモンスターが生息している。

特に毛玉とキラバットは厄介である。毛玉は攻撃するとバラバラになり、戦いにくい。

キラバットは全体攻撃じゃない攻撃方法を行うと回避行動をとることがあり、2回まで攻撃を回避してしまう。

こうして、一本道である洞窟をねりねは進んで行った。

洞窟の奥には巨大なねずみのモンスターがいた。

ジャイアント・ラット。大きなねずみのモンスター。ボス系モンスターの中では割と弱い方。取り巻きにねずみ客分がいる。

「ドルマツ！」

私は闇を集めて大きな闇の塊をジャイアント・ラットへと放った。ジャイアント・ラットは苦しくもがいている。

ジャイアント・ラットは私へと牙をむいてきた。私はその大きな体を避け、短剣で腹の中心を突き刺した。

血がボタボタと落ちるが、ジャイアント・ラットはすぐには倒れない。

「スラツシュツ！」

私は短剣でジャイアント・ラットを斬りつけた。ジャイアント・ラットは瞬時に絶命した。



ねずみ客分は私の圧倒的な力に怖がり、逃げていった。

私は村へと戻った。

「ありがとうございます。これで私たちの村はねずみのモンスター達へおびえずに済みます。では、報酬は何がいいですか？」

「携帯食をください。あと、村の大きなおっぱいの美少女達に囲まれますっ！」

「わかった。携帯食とおっぱいハーレムの報酬をあげよう！」

こうして、私は1日中おっぱいに囲まれてすごした。

## 第2話 もりのようかん

一人の少女は森を歩いてきた。その名前はねりね。短剣と盾を持っており、雰囲気的に剣士に見える。

金髪の長いツインテールに真っ白な白百合のリボンをつけている。

白百合のリボンはリボンの一種で状態異常になる頻度が下がると言う特殊能力を持つ貴重な防具だ。完全に状態異常を防げるリボンじゃないにしろかなりのレアアイテムである。

目は赤目、服装は黒色のドレス。黒バラのドレスと言ってもいいだろう。あと、黒いブーツを履いてる。

ねりねは風来人であり、別世界からなんらかの原因で来てしまった存在であった。元の世界に戻るための手がかりを見つかるべく、旅を続けていた。

今、ねりねは森の中にきている。森を進んでいくと小豆色の四角い洋館があった。とつても大きな森の洋館である。

「この洋館、少し怪しいなあ．．．」

こうして、ねりねが洋館を怪しく思い、観察していると、3人組の冒険者が現れた。

一人は金髪のくせつけなロングヘアの少女。一人は金髪のショートカットの少女、もう一人は白髪おかつぱ頭の・・・見たところ男っぽいようだ。

「なあ、美希、この先に本当にあるのか？」

「イザーク。きつとあるよ、ナタネ村の近くの森に森の洋館があるって聞いたもん」  
「でも・・・危険」

「ステラ、大丈夫だ。問題ない。死にはしない！」

イザークが死という言葉を使った途端ステラと呼ばれる少女は怯えだした。  
ステラは死がとても嫌いである。

「死・・・怖い」

「まあ、大丈夫さく、落ち着こう、落ち着こう！」

「美希、ありがとう」

こうしているうちにねりねと3人組はばたりとであつた。

「だれだ？」

「私は美希。星井美希」

「この洋館、一緒に探検していいですか？」

「はい。オツケーだよ。仲間が増えれば心強いよー！」

こうして一時的にねりね、美希、イザーク、ステラのパーティーが出来た。

そして、森の洋館へと足を踏み出してゆく。

森の洋館はぬるくとした柔らかい地面の建物だった。正面テラスに大きな階段が見えた。

「この階段を上ろうよ」

「賛成！」

ねりね達は階段を上る。上っていると2匹の魔物が現れた。

ヤミキチと怪しい人魂だ。両方ともゴースト系の低ランクモンスター。あまり危険はない相手だ。

「うりゃあ!!!」

イザークはビームサーベルでヤミキチを斬りかかった。ヤミキチは一撃で倒れた。

「美希の攻撃、いっきます〜！」

星井美希は怪しい人魂へ剣で斬りつけた。怪しい人魂はその攻撃を回避した。

「私の攻撃・・・いきますっ！」

ステラは怪しい人魂へと攻撃を放った。怪しい人魂は体を変えてステラへと攻撃をしてきた。

「あ、危ないっ！」

ねりねはステラを庇い、盾で攻撃を防いだ。

そしてイザークがビームサーベルで怪しい人魂も仕留めた。

「はあ、はあ」

星井美希はその戦闘で少し疲れた。しかし、まだまだ洋館探索は始まったばかりである。

ねりねたちはその洋館の奥を進んでいると大きなマムルが座って下を向いていた。

そして、パコレプキンとガイコツまどうが襲い掛かってきた。

「こいつらは俺が倒すっ!」

イザークはビームサーベルでガイコツまどうへと攻撃を放った。ガイコツまどうはその攻撃を耐え、イザークへ杖で攻撃。

ガイコツまどうは魔法使い風のモンスターだが、握力も高く、イザークは吹っ飛ばされた。

「美希、がんばるっ!」

星井美希は剣でパコレプキンへと攻撃を放った。しかし、パコレプキンは攻撃をすり抜けた。

パコレプキンはある程度の熟練者じゃないと攻撃が通らない恐ろしい敵であった。

「・・・私が倒す!」

ステラはイザークのビームサーベルを借り、パコレプキンへと攻撃を放った。パコレ

プキンはその攻撃をすり抜けた。

パコレプキンはステラへと思いつきり攻撃を放った。ねりねは短剣で攻撃を受け止めた。

そして、斬りかかった。

パコレプキンはその攻撃で静まりかえった。

ガイコツまどうはねりねへと魔法弾を放った。ねりねは盾で魔法を防ぎ、短剣で攻撃をした。

この短剣は妖刀かまいたちの能力を持っており、広範囲攻撃が出来るのだ。

ガイコツまどうはその攻撃を食らい、骨も残らないほどバラバラになった。

ムシャ・・・ムシャ・・・

大きなマムルは森の洋館を食べていた。甘いにおいあたり一面に感じている。

ねりねはつぶやいた。

「この森の洋館は羊羹だったんだ！」

正しく、この森の洋館は羊羹で作られていた。巨大な羊羹である。

ねりね、美希、イザーク、ステラは大きなマムルと一緒に森の羊羹を食べていった。

「マムル〜」

マムルの太い声が響く、ねりねたちは森の羊羹の一部を荷物に加え、旅を再開する。

「美希たちは行動分かれる事にします。まだ、出会えたらよろしくなの」  
「うん、よろしくお願いします」

「ナタネ村は森を抜け、小さな谷を進んだ先にある」

「ありがとう、イザークさん」

「何回も助けてくれてありがとうございます。ねりねさん」

「いいってことよ。お互い仲間だったんだし」

と別れを経験し、ねりねの旅は続く。

### 第3話 ナタネ村へようこそ

ねりねは森を抜け、小さな谷に来ていた。

小さな谷はナタネ村に行く途中にある谷。小さな谷を通ればナタネ村まではあと少しである。

ナタネ村はいくつかの伝説がある村で、ある子供が鬼から村を救ったと言う噂もあるぐらいである。

小さな谷は数十分でねりねは抜けた。本当に小さな谷で生息している魔物も少なめ、いたとしてもマムルとチンタラぐらいである。

ねりねは小さな谷を抜けて、山道を少し進んでゆくと村が見えた。

そこはナタネ村。かつて鬼によって襲われていた村であり、まだ幼かった頃のシレンと呼ばれる風来人の少年が救った村。

「まずは・・・むみゆうのうどんを食べるっ！」

ねりねは村を進んでいき、むみゆうと呼ばれるうどん屋へと足を進めた。

「むみゆううどん一杯ください！」

「あいよ」



うどん屋のお婆ちゃんは快く迎えてくれた。

そして、うどんがきた。

「特別に油揚げを加えておきました。値段は普通のすうどんの値段でいいです」

「ありがとうございます」

ねりねは一礼をし、うどんを美味しく召し上がった。

むみゆううどんはマムルの尻尾で弾力を上げたうどんとマムルの尻尾で出汁をとったスープのうどん。

マムルの尻尾で取れた出汁は極上の味をしていても美味しいのだ。

こうしていると、ねりねは客の中に鬼が何人か混じっているのに気がついた。

「お、鬼がいます、大丈夫ですか」

「あはは、鬼さんも立派な客だよ。ナタネ村はシレンさんが救った後、鬼と共存の道を歩むことにしたんだ。鬼と人のハーフも何人か生まれているらしいしねー」

「そ、そうですかー」

ねりねは驚いた。鬼と人間が共存しているなんて、そして鬼と人間の子が出来るなんて。

とねりねはうどんを食べていると、大きな警報が鳴り響いた。

その内容とは……もののけ王国にいたモンスターの一部が逃げ出したと言う話だ。柵がいくつか壊されている。

逃げ出したモンスターはギガヘッド、岩獣ガガン、ウルロイド、プチフェニックス、ンドウバみそじの5体。特にギガヘッドは元大金持ちの男と言う人間だった上に鉄檻に閉じ込められるという最悪な状態だった。

そのため、檻から脱出できるチャンスは活かそうと思い、逃げ出した。

「誰か、逃げ出したモンスターを捕まえてくれませんか？」

その男はムチゴロウ、このもののけ王国のオーナーだ。弱そうで情け無い顔をしているのだが、理想は大きく、もののけ王国を全国に広げ、有名にするのが夢である。

ナタネ村でモンスター達を再び捕まえてくれる風来人を何人か募集していた。

「私、参加していいかな」

この少女は終つかさ。楽園の酔的な巫女と言う通り名を持つ風来人。やや黒い一面を持つ存在でもある。

ライトパープル色のシヨートヘアに黄色いリボンつきのカチューシャをつけている。

「はい。お願いします」

「あたしも参加するねっ！」

その女の子はメイ。腰のあたりまでのロングヘアをポニーテールにしている幼女。

武器は剣のようだ。

「モンスターが逃げ出したのね、いいわよ。捕まえてあげるわね！」

その女性は白い帽子を被っており、金髪のアートロングの髪をしている。

「私も参加させてください！」

ねりねはそう言った。ムチゴロウはそのねりねを含めた4人をモンスター再び捕まえるクエストに雇った。

「このモンスターの壺で捕まえてください」

モンスターの壺。この世界にある壺の一種。モンスターの壺をぶつけられたモンスターはその壺に閉じ込められ、自由に出し入れが出来る。

そして、一緒に戦ってくれる。モンスターが仲間になるのだ。

「あと、倉庫に三銀回飯槍が1本ありました。その武器を使う人いますか？」

「私、使いませんっ！」

「あたし、いらないよー」

「私は使いません」

「いえいえ、いりません」

三銀回飯槍はナタネ村に伝わる伝説の槍。前三方向と正面2マスを攻撃でき、壁の中にいる敵も貫き、与えたダメージの一部を回復でき、おにぎりも得られる強力な槍。

投げてでも遠投状態にならず、5つの能力は全て武器の特徴。基本攻撃力30、プラス限界99、印数こそは少ないがマゼルンと白紙の巻物でフォローすれば16個になる。会の印なり、種族特攻なりを入れれば最強の武器となる。だが、大人の男じやないと重くて両手持ちになるのが痛い。

しかし、4人の風来人はみな、そのヤリをいらなかった。一人ひとり独自の戦い方があり、いまさらヤリは必要ないのだ。

それに伝説の槍をやすやす受け取るわけにもいかなかったのであった。

ムチゴロウとの会話に割ってきた存在がいた。スカルソルジャー、炎黒魔人、槍兵イソギン、キングナイトが襲ってきた。

そいつらはムチゴロウの声を盗み聴きしていたモンスター達であった。

スカルソルジャーは骨の戦士。大回転攻撃で自分の周囲にいる敵味方問わずを攻撃する。

炎黒魔人はタウロスよりもごつくて身長の高いモンスター。その戦闘能力もかなり高いと思われる。

槍兵イソギンはイソギンチャクのモンスター、攻撃力が高く、攻撃に毒があり、相手を麻痺させてしまう。

キングナイトは銀の矢を放つ能力を持つ恐ろしい騎士風のモンスターだ。また、直接

攻撃系の受けたダメージ分跳ね返す能力を持つ。

「つかさいつきますすー！ フレイムタワーッ！」

終つかさは炎を呼び出し、その炎は塔のような高さとなった。

体力の少ない槍兵イソギンを一撃で倒したが、炎黒魔人の勢いが増した。炎黒魔人は炎攻撃が効かないのだ。

「愚かなりね〜」

金髪ロングの女性はそう呟いた。その数秒後、空間から現れた氷のクナイや光の玉が炎黒魔人を貫いた。

炎黒魔人は一撃で崩れ落ちた。

「シヤドウ・ブラストツッ！」

キングナイトのいる位置に薄紫色の爆発が起きた。キングナイトはその一瞬の出来事が全くわからずに一撃で倒れ去った。

「あたしもいつくよー！ 十文字斬りッ！」

メイはスカルソルジャーへ向かって十文字斬りを放った。十文字斬りは十字架に相手を切り裂く技。十字はゴースト系のダメージに特攻なので大ダメージをあたえられる。

スカルソルジャーは一撃で力尽きた。

「あ、危なかった。あんな知らないモンスターがいるなんて！」

「ムチゴロウさんも知らないんですか？」

「はい。初めて見ました。とても恐ろしいモンスターです。もしかしたらものけ王国の檻や柵を壊したのもあのモンスターだったりして・・・」

という訳で続く

## 第4話

ナタネ村についたねりね。もののけ王国のモンスターが逃げ出した。

その逃げ出した原因の敵の存在、そして再びモンスターを捕まえるクエストが今、始まった。

「全員でパーティーを組んでモンスターを捕まえた方が現実だが、1秒でも時間が惜しいと思う。一人ずつで4人で分かれて行動の方がいいんじゃないかと思う」

ムチゴロウの判断はあんまり正しくないかもしれない。とはいえ、今回のムチゴロウの考えは一つの考えだろう。

大人数の方が確実性や安定性はあるが、人数を分けて搜索したほうがモンスターを捕まえる効率は高い。

その分一人一人が危険だったり、デメリットもあるが、このメンバーならそれぞれ一人でも十分だろうと、ムチゴロウは考えたのだ。

私ねりねはシュテン山道の中級の道を進んだ。その先に捕まえるべきモンスターがいるかもしれないと判断したのだった。

せせらぎ峡谷を進み、群青の洞窟へとたどり着いた。

眠っているちゅうチンタラを刺激しないように歩き、襲ってきたボウヤーはみね打ち。

そうしていると提灯をつけているアンコーと黒帯の男、そして小さなマンボーが私へ襲い掛かってきた。

「ブラックウイドウツ！」

ブラックウイドウ（Black Widow）とは黒い未亡人と言う意味を持つ言葉。クロゴケグモの事も指す。

闇属性低レベル魔法の一種で自分の魔法攻撃力に依存した魔法攻撃である。

ドルマ系とは違い、自分の実力次第で威力を發揮する魔法と言える。

小さなマンボーは闇の塊を喰らい、一撃で死に絶えた。

アンコウは電線を放った。私は盾で電線を防ぎ、短剣でひと斬り。

提灯アンコーは真つ二つになった。

「ドルクマツツ!!!」

小さな闇の雷が集まり、黒帯をしとめた。黒帯は力尽きた。

「この群青の洞窟にこのようなモンスターがいるなんて・・・もしかしたら逃げ出したモンスターもいるかもしれないな」

私は先へと進む。すると、1匹のウルロイドがいた。



もののけ王国から逃げ出したモンスターだ。間違えない。

私はモンスターの壺を取り出し、投げようとした時、2体の魔物が現れた。

「フハハハハ、このゾンビ騎士（機械化）に勝てるかな！」

「ははははは、ホウジロサメの力、見せてやるっ！」

1体はゾンビ騎士（機械化）。名の通り体の大部分が機械化したゾンビ騎士。その戦闘能力は高い。

もう1体はホウジロサメ。鮫型モンスター。鮫のような姿なのに地上にいるのは少しおかしい感じだ。

ゾンビ騎士は私へと攻撃を放ってきた。私はその攻撃を回避する。

回避したところにホウジロサメの巨大な口が襲い掛かる。

「カオスウイドウツツ！」

とつさにカオスウイドウを発動してしまった。

カオスウイドウはブラックウイドウの強化版の魔法。素早く魔法攻撃を撃てるメリットがあるが、凄くコストが重く、使いにくい。

このような鮫に食われる寸前とかじゃ、出し惜しみも出来ないでしょう。

鮫は一撃を喰らって白目で泡を吹いて倒れた。

ゾンビ騎士は攻撃を放つ。私は盾で防いだ。

「クッククク、私の風魔の盾の前ではお前の攻撃は無力。そして私の短剣・ジブリールは何者も一撃で斬り裂くっ！」

私はジブリールでゾンビ騎士を貫いた。ゾンビ騎士（機械化）は私にとっては大して強くない相手だったようだ。

私はウルロイドを仲間にし、先へと進む。

オトト兵やオトト軍曹に道案内をしてもらい、シユテン村中腹へとたどり着いた。

町の人の情報によると、ポニーテールの幼女が後半初級の山道、金髪の白い帽子の人が中級の山道で先に進んでいた様子。

となれば、私は上級を進むほかない！

上級にはマゼルンという生物がいる。マゼルンに装備品を投げると合成してくれて、更に一部のアイテムと異色合成が出来るという魅力的なモンスターである。

竜巻の魔物、骸骨の魔物、電卓の魔物、破壊ロボット、ゾンビなど、数々の魔物が襲ってきた。

私は多量のモンスターとの連戦を行い続けた。

白銀の霊峰にて、ギガヘッドを見つけた。きつと逃げ出したギガヘッドなのだろう。そのギガヘッドに近づこうとした際に色々なモンスターが襲ってきた。

グネグネハニーワ。グネグネつと踊り、相手の攻撃力を一定時間下げる能力を持つ埴

輪型モンスター。

タイガーキング。虎の王でキャラクターをキャラクターに投げると言う恐ろしいモンスター。

乱れ馬將軍。とても早い上にかまいたちの矢を放ってくる。馬王よりも名前劣化したようにも思える。

ウルトラヘッド。飛び道具の射程ぐらゐの射程で頭を飛ばしてくる恐ろしいモンスター。

奈落マムル。パコレプキンみたいに壁をすり抜けるがこの霊峰では意味が無いモンスター。

ヒツジ神。ヒツジの神様。想像を絶する恐ろしい魔法を使うモンスター。

「とはいえ、私にとつてはこの程度の相手、雑魚も等しい・・・」

グネグネハニーワをジブリアルで斬りつけ、タイガーキングにドルマドンを放つ、ヒツジ神と乱れ馬將軍をシャドウブラストと一緒に仕留め、奈落マムルを一刀両断、最後にウルトラヘッドにカオスウイドウでとどめをさす。

「ギガヘッド、ゲットお〜！」

ギガヘッドにモンスターの壺を投げ、仲間に加え、シュテン山の頂上へとたどり着いた。

## 第5話

私、ねりねはシュテン山の頂上へとたどり着いた。

そこは山の民が住む町。山の民は赤い服を着ており、赤い帽子を被っている。ヘアスタイルはスキンヘッド。

ある意味お坊さんに近い存在なのかもしれない。

この町に住んでいる人はみんな赤い服。緑色の服の人や黒い服の人はいない。

「イカダ借りてナタネ村にもどろっ！」

ジロウと呼ばれる山の民さんにイカダを貸してもらい、イカダでナタネ村へと帰る。

こうして私はギガヘッドとウルロイドを捕まえた。

金髪帽子さんも終つかささんもメイさんも目的のモンスターをしつかり捕獲したよ  
うだ。

「みなさん、あり……」

ムチゴロウの背中にレーザーが当たった。

「ハハハハハ、俺の名はスカルスperlラージー。我ら天空都市軍の目的はこのナタネ村を支配し、後に世界全土を侵略する……」

「フアフアフア、わしは炎黒爺神様なのじゃ。炎黒人の神様であり、天空都市軍最強の戦士であるぞー！」

「ボクは伝説炎レーザー打ち將軍。ボクのレーザー命中した。次はお前達を倒す！」  
「私の名はサンラント。天空都市軍の三賢者の一人。お前達を殺してやるツツ！」

炎黒爺神様。天空都市軍三賢者。最強の攻撃力と防御力を持つ恐ろしい爺。強力な火柱を出現させる能力を持つ。

サンライト。天空都市軍三賢者の中では最弱。強制眠り能力を持ち、手下を最大4体まで出現させる能力を持つ。

伝説炎レーザー打ち將軍。天空都市軍のメンバー。ムチゴロウに奇襲攻撃をするためにいるだけで戦闘能力は乏しい。

スカルスペルレーザー。天空都市軍三賢者のリーダー。スカルファイター種とスペルソーサー種の融合体。通常攻撃と魔法を無力化することができる上に大回転攻撃も配備。

「メイの攻撃いつきまゝすつ！ つるぎのまいッ！」

メイは踊りながら伝説炎レーザー打ち將軍中心に斬りつけた。

伝説炎レーザー打ち將軍は3発ほどで力尽き、爺やサンライトへはダメージがあるよ  
うだ。

スカルスペルラージーには効いていない様子

「ダークラッツ！」

私は闇の魔法を放った。サンライトを一撃でしとめ、炎黒命神様にも大きなダメー  
ジ。

「霊符「夢想封印」」

つかさは霊符「夢想封印」を発動した。数々の属性の力が敵全員へと襲い掛かった。

この攻撃は魔法扱いでもなく、スカルスペルラージーにも効いている。両方とも倒し  
てしまった。

「私の出番はないのか・・・」

金髪帽子の人には出番がなかった。

「みなさん、もののけ王国のモンスターを捕獲してくれてありがとうございます！報酬  
を渡します」

私たちは報酬として中々良い金額の金銭をいただいた。

私たちはもう少し、このナタネ村へ滞在をすることにした。

ナタネ村にはたくさんの方がいた。

鬼の女房と暮らしている車屋の男、訓練場を開放しており、稽古をしてくれる人など、数百人の村人がいた。

この村はそこまで規模が大きくないのかもしれない。

そこにいるリクという青年とキララという鬼の女性もその住民であった。

私はリクの家へ滞在することになった。リクやキララは快く受け入れた。

「始めまして、私の名前はサスミと言います。宜しく願います」

この女性はサスミ。リクのお姉さんで青いロングヘアーに大きな胸を持つ女性。

そのひぎに添い寝しておっぱいに触らりたい。

「私、ねりねと申します。添い寝したいです」

「いいよ、さあさ、寝んねしな・・・」

こうして私はサスミさんのひぎに頭を乗せ、巨乳に触られながら添い寝をしてい  
た・・・

## 第6話

数日後……

ある日の真夜中。

「フフフ、そろそろあの計画を発動しようかしら……」

この女性はサスミ。青色のロングヘアの女性。リクのお姉さん。

サスミは何か、悪巧みをしていた。

「この村は平和ボケをしている……、だがそれは今日で終わり。私は機会を待っていた。ずっと、ずっと」

このサスミには訳があった。サスミは大きくて長い書物を読んでいた。

その内容とは鬼の真の宝、本当の鬼族の話が書かれていた。

鬼ヶ島にいた鬼の親分やガラハと呼ばれる鬼の少年はあくまでもそこまで恐ろしい鬼ではない。

それとは別に真の鬼が存在していた。

「この鬼姫サスミがナタネ村で得た情報を鬼の国に報告をしよう。そしてこのナタネ村は我ら同胞が支配してやろう……」



このサスミと言う女性は実は鬼の国にいる鬼の種族だった。もちろん弟のリクもその鬼族なのだが、自覚も無く、鬼だった記憶がない。

ずっとリクは人間として生きてきた。

次の日、ねりねはおきた。

すると、家の中には何もなかった。

そしてナタネ村にはリクもサスミもいなかった。

「ねりねさん、リクの事知りませんか？」

この鬼の女性はキララ。リクの彼女だ。

リクの事が心配になってねりねに話しかけたのだ。

「ううん、知らない。キララちゃんごめんねー！」

「いいよ。気にしてないよ」

こうして私はナタネ村でリクやサスミの情報を調べた。

数時間の聞き込みの結果。

シユテン山道幻の4つ目の山道を通って鬼の国と呼ばれる地に向かったらしいと言う情報を得られた。

私はむみゆううどん屋でうどんを食べ終わった八雲紫さん、その他メイちゃんとキララさんをお願いして同行してもらったことにした。

ちなみにキララちゃんのおっぱい吸って良いか聞いたら激しい炎を吐いて私は黒こげ、キララちゃんは怒った。

シュテン山幻の4つ目の山道は3つの山道よりも長く険しい道のり。恐ろしいモンスターもいくつか出現するらしい。

とはいえ、私たちなら楽勝なはずだと思っただが……

全然楽勝じゃなかった。謎の2人組が現れたのである。

「私たちはサスミさんの命令により、ここを通ろうとしている者の足止めをしに来ました。どうしても通りたいなら私たちを倒しなさい」

「絶対に無理だと思えます。私たちはあなた達の数倍強い。あなた達はここを通るのは絶対不可能です！」

そこに現れたのは2人の人間だった。一人は青髪のツーサイドアップの女の子。もう一人は全身に白いローブや白いフードなどを被っている。声も機械で弄って自分の声を出していない感じ。

「まだ、試合開始してないのにわからないじゃない」

「そうですね。メイは負けません！」

「そうそう、あなた達は即倒します！」

「早くサスミとリクに会いたいのだ。どいてよっ！」

こうして戦いは始まった。

「大賢者と言われた私の攻撃を受けてみよ！」

青髪の少女は魔法で作った塊を私たちに放ってきた。私がカオスウィドウを打って相殺する。

白い服の人はヤドリギを飛ばしてきた。メイは剣に炎の力を宿し、強力な剣の技を放った。

ヤドリギの威力が高く、メイの剣技もむなしく、ヤドリギが襲い掛かる。

八雲紫は強力なスペルカードを発動し、ヤドリギの効力を失わせた。

「ねりねさん、キララさん、メイさん、ここは私が食い止めます。先に行つて下さい」

八雲紫は察した。この相手は4人で束になつても勝てる見込みがある相手ではない。

だが、八雲紫一人でも長時間の足止めは出来ると判断したのだった。

私たちは八雲紫の好意をありがたく受け取り、先へ進む。

「通しませんッ！」

青髪の少女は強力な魔法を詠唱した。短い詠唱時間で強力な魔法を発動できるようにする。

だが、紫はスペルカードを速攻で発動してその魔法を止めた。

白い服の人は大量の使いきった古い工具品を媒体にし、大量の工具品の雨を降らした。

八雲紫はスペルカードで3人を守る。

こうして、3人が先に進んだ。